

## リニューアルに伴う展示構成

### Ⅲ. 企画展示室

宮本康男\* 渡部均\*\*

#### 1. 旧企画展示室について

旧企画展示室は当館が開設された当時としては優れた展示室であったが、開館から長い日月を経たことにより、様々な設備的課題を抱えるようになっていた。

それらの多くの問題を解決して、企画展示室をより安全で利用しやすいものにするために、この度の改編が進められた。

ここでは、まず旧企画展示室の状態と課題を明らかにし、次章以降で製作工事等の経緯を報告する。

#### (1) 旧企画展示室の仕様概略

面積	333㎡
天井高	4000mm
天井	鉄筋100mm格子仕様
床	下地用絨毯張り
電源	天井電源レール 床埋め込みコンセント ケース内コンセント(上下)
壁ケース	高4400mm 奥行き1400mm ステージ高450mm ペイント仕上げ 有効ケース内高3950mm ガラス窓高2200mm 前面ガラス引き戸開閉 ガラス：並ガラス 空調／給気：天井 排気：床下 照明：灯具はケース内に設置 天井 退色防止型蛍光灯2列 ステージ床 退色防止型蛍光灯1列 ※何れも調光無し スポットライト及び取付用ステー設置 ピクチャーレール：天井2列 バックパネル：木軸5mm合板

布クロス張り

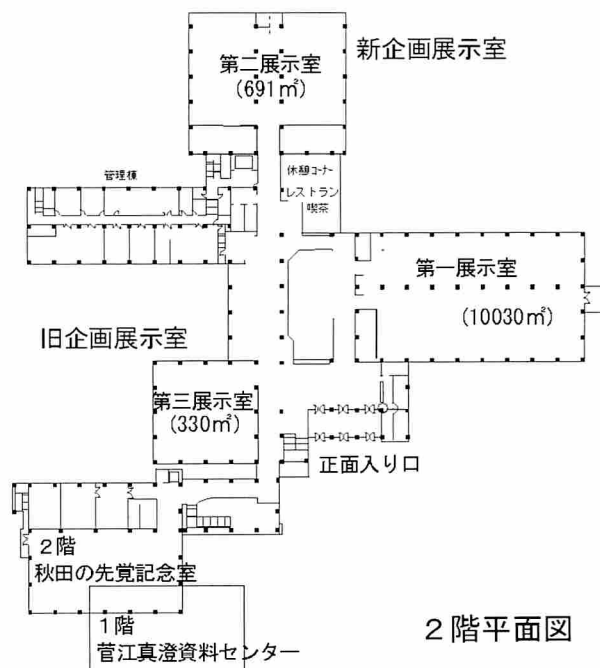


図1 旧企画展示室と新企画展示室の位置

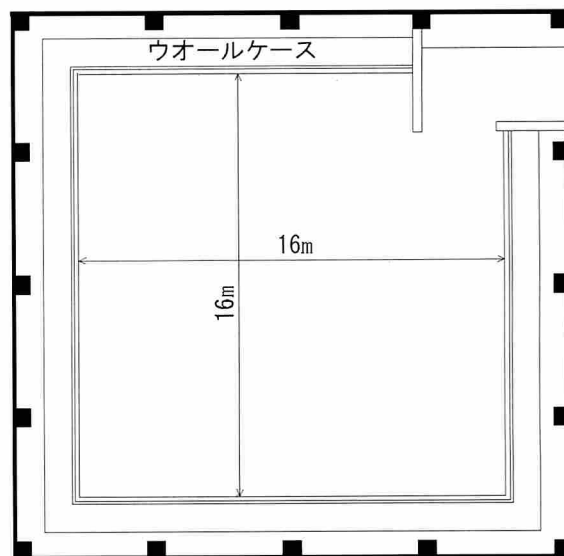


図2 旧企画展示室内のウォールケースの配置

\* \*\*秋田県立博物館

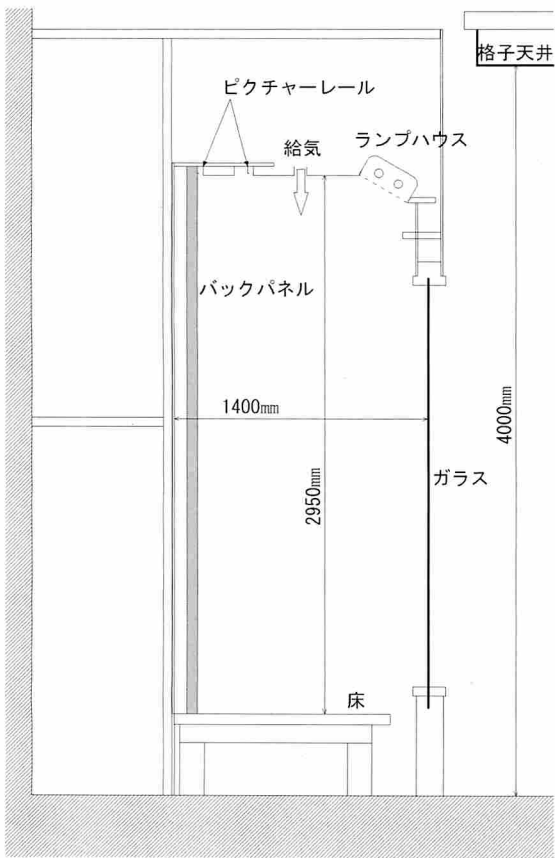


図3 旧企画展示室ウォールケースの構造



図4 旧企画展示室 可動三面ガラスハイケース

## (2) 旧企画展示室での課題

企画展示室の面積は約330㎡で、日常の企画展示の実施のためにはやや広く、規模の大きな特別展示などでは手狭であった。そのため、特別展示実施にあたっては第2展示室の歴史、民俗、考古の部門展示を撤収し、このスペースも利用した。必然的に展示会場が二つに分かれるため、一体感の無い展示になりがちであった。また、半分だけ見て残り半分の展示に気付かずに帰ってしまう観覧者も後を絶たない状態であった。

天井高4000mmは自然系の展示をするには低いと感じることが多かった。大型恐竜などの展示はしたくてもできない状態であった。人文系の展示にあっても、ちょっと大きな仏像等は展示が困難であった。

自然系の展示を行うにあたって、一般的なウォールケースは使い勝手が悪いことが多かった。自然系の展示では、露出した壁面を必要とする場合も多く、仮設パネルで対応せざるを得なかった。

ウォールケースの窓の固定ガラスと引き戸になっているガラスには重なり部分があり、資料鑑賞の妨げになっていた。また、ケースのガラスが着色の濃い並ガラスのため、資料が緑味がかって見え、視覚的に良くなかった。

安全面ではケースのガラスには、破損時の飛散防止措置が施されていなかったため、改善が望まれていた。地震災害等にあつて、資料の保全以上に観覧者へのリスクが大きかった。

ウォールケースの開閉が引き違い戸であるため、固定ガラスと引き戸のガラスとの間に1cm以上の隙間が存在し、ケース内に虫が侵入して飛び回る事態が多々見られた。また観覧者が隙間からリーフレットなどの物品をケース内に落とし込む事故もしばしば起きていて、この隙間が悩みの種であった。

照明灯具がケース内に設置され、格子状の散光板で陳列空間と仕切られるのみであるため、ランプハウスの展示空間からの隔離が望まれていた。

照明用の蛍光灯は退色防止形のもが使用されているものの、調光設備が無く、減光が必要な場合は、灯具前にトレース紙を貼り付けて、その枚数により光量を調節する必要があった。



背面パネルを前にせり出させる場合は90cm幅の背面パネルを外して、手前側の天井の溝にはめようになっていたが、パネル相互が溝と突起でかみ合わせてあり、任意の数枚を移動させるためには全体を動かす必要があった、その作業が並大抵のものではないため、バックパネルを移動させることはあまりなく、多くは別途にパネルを製作設置する方法が採られていた。

天井には2列のピクチャーレールが回しており、パネルを前進させた場合も、ワイヤーによる資料の懸架に支障はなかったが、バックパネルにピクチャーレールを付けた場合に比べて自由度が低かった。

バックパネルは5mm厚の合板下地にクロス張りであったため、軽い発泡スチロール製のパネルをピンワークによって取り付ける等の作業には問題がなかったが、重い展示資料の転倒防止の為にアンカーを設置するには適していなかった。また、重量物の壁付けにも制限があった。

ケース内の空調については、環境を素早く調節できるのが便利と言えば便利であったが、場合によっては環境が急激に変わるので、資料にとってはリスクの大きい環境でもあった。

企画展示室のケース内の空調については、必要があれば夜間は電気暖房への切替で24時間空調に対応できたが、展示室内は、機械室要員の勤務する時間のみしか空調が入らなかった。普通はケース内の夜間空調は行われていなかったため、冬期などはケース内の温湿度環境の日変化がとても大きかった。

ケース内空調での大きな問題としてあげられるのが、ケース内を風が吹くと言うことである。衣桁に掛けた着物がはためいたり、掛け軸がふらふらしたりと言う状態があって、改善が望まれていた。

また、これは根元的な問題ではないが、空調システムのダクトは時間とともに劣化する。何らかの事情で生じたダクト内面のさびや塗料が剥落した小さなゴミが、空調の吹き出し口からケース内に持ち込まれていた。当然展示室内にもダクト内に長年たまったゴミが継続的に降っていた。いろいろ手は尽くしたが、問題の解決とはならず、最終的

に展示時にはケース内の空調を止めるしか方法は無かった。

展示室内什器として使用してきた可動型の展示ケースは大型の三面ガラスハイケースと、覗きケースである。三面ガラスハイケースは、前面ガラス三枚引き違い戸仕様のもので、照明のランプハウスと展示空間を仕切るものは格子状の散光板のみであった。この灯具には調光装置が無かったので、後に改造をして調光だけはできるようにした。ガラス戸の袴の厚みのためガラス戸相互の間には数ミリの隙間があり気密性が良くなかった。また、ガラス戸相互の重なり部分が、資料鑑賞上の妨げになっていた。このケースの利点としては、ケースを密着させて並べても、前面開閉なので資料の出し入れができたことがあげられる。

覗きケースはフレームの付いたガラス上蓋を引き上げて開く仕様で、気密性はやや良好ではあるがシールがついていないので完全ではなかった、また引き上げ蓋にダンパーが付いていないので開閉に不安な要素があった。さらに、照明用の蛍光灯と灯具が狭いケース内に設置されていて、調光設備もないことから、発熱や強い光等による資料への影響が懸念される場合があった。

最後にバックヤードの問題をあげておく。企画展示室を運営する上で不可欠な要素としてバックヤードの存在があげられる。このことは、実際に企画展示室の運営にあたるなかで骨身にしみて感じていた。旧企画展示室ではこれに付随する十分なバックヤードが無かった。企画展示室の準備室として割り当てられていたのは、狭いパイプスペースで、普段使う展示台だけでもはみ出す状態であった。そのため階違いの1階にあるもう一つのパイプスペースも展示台の収納場所として使用し、さらに小会議室、講堂のステージ袖の空間とありとあらゆる隙間に展示台、パネル、小型の展示ケースがひしめいていた。さらに大きな問題は大型の三面ガラスハイケース、覗きケースの収納であった。これらは廊下以外に置く場所が無い上にハイケースは分解しなければ展示室から出せない大きさであった。1台や2台ではなく、それぞれ10数台保有していた。企画展示だけでなく、第2展示室での部門展示と呼ばれたロングスパンの

小企画展示でも必要としたからである。しかし、ハイケースを必要としない企画が実施されるときは収納場所が無く本当に困った。展示室内で展示ケースの後に展示ケースを隠したりもした。展示の企画担当者には、収納場所がないので、構成上無理でも何とかハイケースを使って欲しいという依頼をしたこともあった。

## 2. 企画展示室の改編に向けて

### (1) 設置の場所について

先ず必要としたのは企画展示室設置のための十分な床面積の確保である。とりあえず目標としたのは、これまでの特別展の展示面積、それは企画展示室と第二展示室の人文部門展示スペースを併せた面積で500㎡～600㎡程度であった。

候補としては、①これまでの第二展示室（人文部門展示＋自然部門展示、生物ジオラマ）、②第一展示室（常設総合展示室）、③機械室跡地（1階機械室を解体した跡地空間）の三カ所が考えられた。

①は面積的には丁度良いが天井高がこれまでの企画展示室よりさらに低い。大きな室内中央に5m間隔で2列に並ぶ80cm角の柱列が邪魔である。天井コンクリートが表面近くに来ている鉄筋の酸化膨張により剥落している部分がある。床面に最大5cmを越える凹凸があり、展示ケースを同じ高さで水平に並べるのが難しい。休憩コーナーのガラス窓から外光が入ってくる等の問題があった。

②は十分な広さと、まあまあの天井高を持ち、柱の間隔も広く取ってあるので、企画展示室を設けるには館内で最も適したスペースであった。広すぎると言う面もあるが、仕切って使えばよい。しかしこの展示室を企画展示室として利用すると、人文系の常設展示室の行き場が無くなってしまふ。第二展示室ではかなり手狭で人文系の常設展示には窮屈である。第三展示室ではもっと狭くなってしまふ。

③旧機械室のスペースについては、空間の形が細長い、所謂ウナギの寝床状であること、床面が一階床面よりもさらに低く、入退室の利便性に問題があること、天井高を確保すれば、ダクトや配管がむき出しとなり、視覚的に良くないことなど

の問題があった。また、階違いなので企画展示へと入館者の流れを誘導する上で問題が生じる。半分地下に掘り込まれた空間なので湿気の心配もあった。

以上のことから、最善なのは第一展示室を確保することであったが、それは人文展示室としても同じであり、何を優先させるかということを考え、企画展示室のチームとしては第一展示室を要求することはしなかった。③は何かとリスクが伴うので②を確保するのが妥当な落ち着きどころとなった。③が最も条件が悪いというのではなく、自然系の展示では機械室跡の天井高が魅力であった。

### (2) 新企画展示室仕様についての検討

企画展示室の仕様については、これまでの反省に立って様々な検討を行った。

#### ①展示室

展示室面積はこれまでの倍以上になるので、状況に応じて部屋を区画して利用できるように、移動間仕切りパネルを自由に設置できるようにする。

新しく企画展示室を作ろうとしている旧第2展示室は躯体としてはかなりの天井高を持つが、空調ダクトを覆う形で格子天井を設置すると、旧企画展示室よりもさらに天井高が低くなってしまふ。企画展示室内に一部一定の広さの空調ダクトが通らない空間をつくり、その部分には格子天井を設置せず、躯体天井までの天井高を確保する。このことにより丈六仏程度は展示が可能な空間が確保できる。

#### ②展示ケース

第一にウォールケースを設置するかどうかということを検討した。自然系としては、はめ殺しのウォールケースは使いにくい。可動ケースを壁に沿って並べて不必要なときは撤収して壁面として利用するというスタイルも検討してみたが、人文展示では可動ケースを並べたしきり壁が邪魔になることがあるし、しきり壁を取って連結するスタイルでは気密性に不安がある。一番困るのは、大量の可動ケースを収納するスペースを確保するのが困難なことである。

以上を考え、ウォールケースは設置する方向で



プランを立てることとした。さらに自然系の展示の利便性を図るため、ウォールケースのガラス窓に雨戸のように展示ボードを引き出して並べ、利用するようにはできないかを検討することとした。

ケースについてはウォールケースの他に、展示室中央に島展示を組んだり、壁面に並べてウォールケースを補完するための大型の可動ケースを導入し、小型資料を間近に見るための覗きケースを導入する。

ケース類はこれまでの反省に立ち、旧ケース類を一新して、諸問題をクリアーした仕様のものの導入を要望することとした。

ケース類は全て気密仕様とし、ウォールケースの中にも空調の吹き出し帰還を設けない。

ケース内に十分な容量の調湿剤ピットを設ける。ケース内の環境は、展示室内の環境と調湿剤で維持しなければならないので、展示室の環境が高い品位で維持できるような展示室の構造と、空調設備を要求する必要がある。気密ケースの導入と展示室のグレードの高い環境維持は不可分のものである。

大型可動ケースについては展示資料を効果的に演示するために4面ガラスケースとし、引き違い戸のないエアタイト仕様とする。また、これまでのより気密性の高い可動型の覗きケースも導入したい。

ウォールケース内のバックパネルは、必要に応じて前方へスライドさせて利用できるようにし、それに伴ってピクチャーレールは天井ではなくバックパネルの上辺に設置する。バックパネルに使用する合板はこれまでの反省に立ち12mm厚とし、アンカーを設置したときに十分な支持力を持たせる。バックパネルは固定のための装置を持つものとし、その操作はできるだけ簡便なものとする。

ケース類に用いるガラスは全て高透過ガラスとし、破損時の飛散防止の措置を施す。

### ③照明

次に照明の問題であるが、灯具は全て調光可能なものとし、できるだけエリアを細かく区分して調光ができることを望んだ。また、灯具が直接展示ケースの資料展示空間に露出しないように、完

全に区画することを条件とした。区画されたランプハウスは放熱の対策が十分にとられたものとし、ランプハウスの構造については、ランプの交換や灯具のメンテナンスにあたって、作業が容易で、展示ケース内に危険が及ぶ可能性の少ないものとした。

### ④空調

企画展示室の空調は24時間運転に対応できるものとし、展示室環境の急激な変化を避けるため、企画展示室の開口部をあまり大きくせず、自動ドアの設置等で出入りが常開にならぬような措置をとる。資料搬入路として、別途に大きな開口を準備し、平常はクローズしておく。

### ⑤バックヤード

最後はバックヤードの問題である。一番の問題は展示のためのバックヤードと言うものが、企画展示のサポートを行う担当者以外には切実なものとして感じられない点にある。今回はなんとしても、企画展示室に隣接し、企画展示室と空調環境を共有し、展示ケース、展示台、パネル、灯具、演示具の相当量を収納できる大きさのバックヤードで、それもハイケースを分解せずにそのままバックヤードから展示室に出し入れ出来る大戸を持ったバックヤードを確保すべく、強く要望することとした。

## 3. 新企画展示室の施工

### (1) 予算との調整

展示室は概ね希望どおりの仕様となったが、ウォールケースについては予算的な問題で一部スライド前進式のバックパネルが設置出来ず、大きな二面のみを、1間幅のバックパネルを前後にスライドさせる仕様となった。ランニングウォールも同じ理由で、企画展示室を中小の2室に区画するためのもの、展示室入り口正面にエントランス表示をするものとの二面についてのみのレール設置となった。また新規の覗きケースへの更新も断念し、旧覗きケースを引き続き使用することとした。残念ながら、ウォールケースのガラス面を展示パネルで塞ぐシステムも実現できなかった。

ウォールケース、大型4面ガラスケース、展示室の空調環境を希望どおりの仕様を実現するため

に、予算との調整で、様々なプランを断念することとなったが、安全な資料展示環境を作ることを第一義として施工を進めた。

## (2) 新企画展示室の仕様

面積	690㎡
天井高	3700mm
天井	アルミ製10cm格子仕様 一部格子天井無し／駆体天井まで5800mm
床	カーペットタイル張り／平準化
電源	天井配線ダクト 床埋め込みコンセント無し 柱下部にコンセント設置 ケース内コンセント設置 ※演示具、清掃用具用電源
照明	配線ダクト取り付け灯具 調光付き 暖色系ハロゲンランプ
壁ケース	高3450mm 奥行1556mm ステージ高400mm 布クロス張り 有効ケース内高3050mm 開口高1900mm 戸：前面引き出しスライド開閉 ガラス：高透過ガラス 内側に飛散防止フィルム貼り付け 空調／ケース内空調無し 展示室空調給気：天井 展示室空調排気：ウォールケース後 照明：灯具は強化ガラスで展示空間と遮断したランプハウス内に設置 退色防止型蛍光灯2列 系統別調光可 スポットライト：ランプハウス内に設置 ピクチャーレール：パネル上辺に1列 バックパネル：軽量鉄骨構造 9mm+5mm合板、布クロス張り 調湿剤用ピット付き

バックヤードは第2展示室を造作壁で区画して2部屋設置。新企画展示室の広さを旧企画展示室の広さの2倍程度とし、残りをバックヤードにあてる。バックヤードから展示室までの経路はすべて計画しているハイケースが通過できるものとする。この広さで、保有する予定の大型ケースは全

て収納出来る。ここからはみ出す展示台、パネル、小型ケースを収納するために階違いの旧変電室を倉庫として確保する。以上がバックヤード確保のための計画である。

## (3) 施工の経過

### ①解体

新企画展示室の造作のために、第2展示室は駆体壁、駆体天井を残して造作、内装を全て解体した。

建築内装を行うに先立ち、駆体天井で表面近くで鉄筋がふくらんでコンクリートの剥落が起きていた部分及び、床の高低差のある部分の処置を行った。

### ②空調ダクト、配線ダクト他電源の設置

空調ダクト配線ダクトは要望どおり、奥の5mスパンの柱間の二区画5m×10mを避けて設置し、この区画は床から駆体天井までの高さいっばいの5.8mを利用できるようにした。台座を含めても1丈6尺の仏像が展示できる。

### ③建築内装、及び塗装、バックヤードの造作、格子天井の設置

展示造作を行う容器としての駆体の内装壁を設置した。また、第2展示室スペースを造作壁により企画展示室とバックヤードに区画した。さらに、駆体天井及び天井部分の空調ダクト、配線ダクト等は展示造作する格子天井を透かして見えるので、黒く塗装して違和感の無いものとした。バックヤードの内装は、予算節減のためプラスターボードの貼りっぱなしで塗装無し、天井は駆体スラブのまま、床は塩ビシート張りとした。バックヤードを出来るだけ広く使いたいと考えたが、一方の部屋には大きくパイプスペースがとられたため、かなり手狭な感じになった。

### ④床カーペットタイル施工

### ⑤駆体建築改装工事完成

### ⑥展示製作／ウォールケース、可動ケースの設置

ケースは、工場で仮組みしたもので出来上がり状態を確認し、駆体の改装と平行して工場製作を進めた。完成したケースを搬入するわけにはいかないので、輸送、搬入が容易な大きさの部材として製作が行われた。



製作したケースの部材は、駆体の改装工事の終了を待って、企画展示室に搬入し、組み立てを行った。

骨組みは鉄骨で、駆体壁と床に固定し、上部は駆体天井にアンカーを打った吊りボルトで細かく吊って固定した。

ケースの筐体はプラスターボードと低フォルマリンの12mm合板、それらに挟まれた防湿シートの3層から出来ている。

前面のガラスは10mmの高透過ガラスで、およそ2間幅のものとおよそ1間幅のものをを用いている。

継ぎ目はケースの気密性を保つために透明コーキング材が充填されている。開閉口はおよそ1間幅で、展示室3面各2カ所ずつ設けられている。開閉は引き戸になっており、固定ガラスと引き違いになっている。レールは固定ガラスの手前に設置されているので、単に引き戸を引いただけでは固定ガラスとの間には隙間が出来てしまうので、電動で開口部の可動ガラスを固定ガラスと同じ位置まで押し込んで、ガラスが同一面に並ぶようになっている。当然可動ガラスと固定ガラスの間には一定の隙間ができるので、開口部の固定ガラスのこぐちに透明シリコンゴム製のシールパッキンをつけて、気密を保つようにしている。開口部の可動ガラスをスライドさせるレールは上辺に設置され、可動ガラスは屈曲節を持つ吊り手により懸架されていて、下端はフリーになっている。このことにより、開口手前に移動させたガラスを開口に押し込むことが可能となる。スライドは手動で、懸架された可動ガラスの押し込みだけを電動で行う。可動ガラスは正確に開口の前に持ってくる必要がある。そのために、可動ガラスを正確に開口の前に位置させないと電源が入らないようになっている。理屈では困難はないように見えるが、可動ガラスが嵌る開口は高い精度で調整されている必要がある。またいくら高精度に開口の幅を調整しても、ケースのフレームが僅かでもガラスの重さで歪めば、可動ガラスを開口に嵌めることは出来なくなる。幅1812mm、高さ2000mm以上、厚さ10mmの板ガラスの重さは想像以上のものであり、ケースフレームは高い剛性を要求される。開口の

調整はケースが完成してからもしばらく続けられた。フレームが荷重に馴染むのにもやや時間が必要であったと見られる。

停電時には手動でも開閉できるようになっているのはもちろんである。

次にウォールケース内の照明について、述べておく。旧企画展示室のウォールケースでは、照明用のランプの交換はケース内からでないと出来なかった。資料が入ってしまうとランプの交換は出来なかった。資料展示前に切れそうなランプは交換しておくのだが、それでも展示期間中にランプが切れることがあり不便な思いをした。その反省に立ち灯具はケースの外から引き出せるようにし、随時ランプが交換できるようにした。要するに展示ケースの天井がガラスで、照明はケースの外から照らしている形である。このランプハウスとのしきりとなっているガラスは5mm厚のフロートガラスで、飛散防止フィルムを貼って安全性を高めている。ガラスの継ぎ目には透明コーキング材を充填して気密性を保っている。

気密構造になったケースは、展示室に温度変化があった場合、それにつれて湿度が変化する。ケース内にはもしもの湿度変化を緩衝するための調湿剤を入れるピットを設置してあるが、ケース容積と使用薬剤の量を検討した結果、初期の設計ではピットが小さすぎることがわかり、調湿剤ピットの容積を大きくした。

ケース内を前進後退するバックパネルは、鉄骨のフレームに12mm合板を張ったもので、堅固である一方相当の重量がある。これをケース天井部のレールから懸架し、軽く動かせるようにした。パネルはレバー操作により簡単にしっかりと固定できるようになっている。

ハイケースもウォールケースと同様に工場製作した部材を搬入して組み立てた。初期の設計から変更した主な部分は、ケース上部のランプハウスの開閉方法と、移動用のキャスターのサイズ、固定用の脚のサイズアップである。

今回製作した可動ハイケースは旧企画展示室の可動ケースに比べてケースの奥行きを大きくし底面積を広げてより安定の良いものとなっている。

ランプハウスは初期の設計では一枚の天板を持

ち上げてランプを交換するものであったが、さらに検討を加えてガルウイング式に両側から半分ずつ開くようにし、灯具をその天板に取り付けることで、ランプの交換を容易にした。

移動用キャスターは初期設計のものより直径を大きくした。それは、企画展示室の床が硬いフローリング材ではなく、タイルカーペット張りであることから、移動を容易にするための配慮である。

床への固定のための高さ調整脚（アジャスター）も初期の計画のものよりは径の太いねじを用い

た。地震で脚が折れるとキャスターでケースが支持されるため、地面の揺れに伴い何百キロもあるケースが走り回ることになる。この危険性を緩和するためにねじ径を太くしたのである。手でねじをまわして高さ調節をする場合、ねじ径は細い方が回しやすいが、ねじにかかる負担も大きく、かえって、ねじ山がつぶれて手動では回せなくなるということがこれまでに多々あったこともねじ径を太くした理由である。

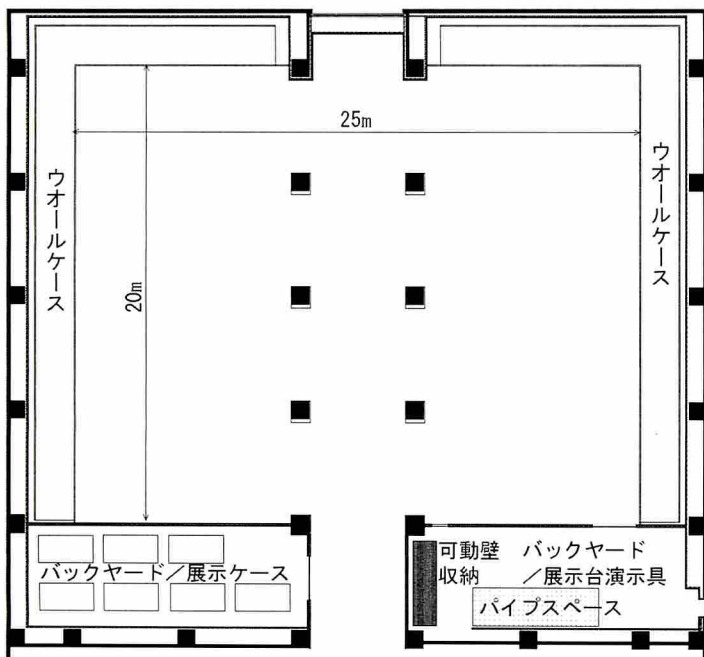


図5 新企画展示室

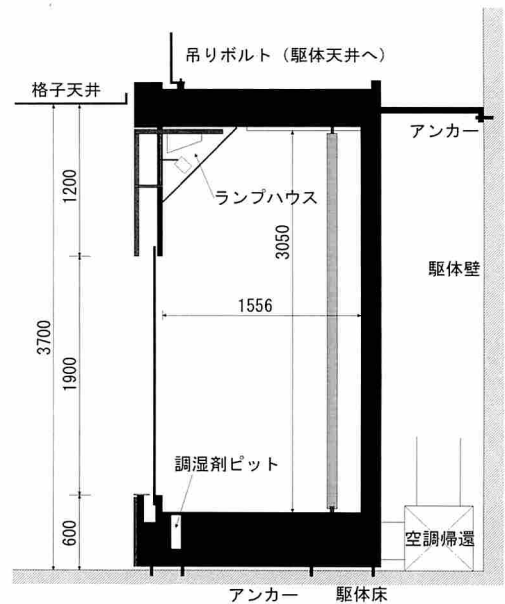


図6 新企画展示室ウォールケース断面

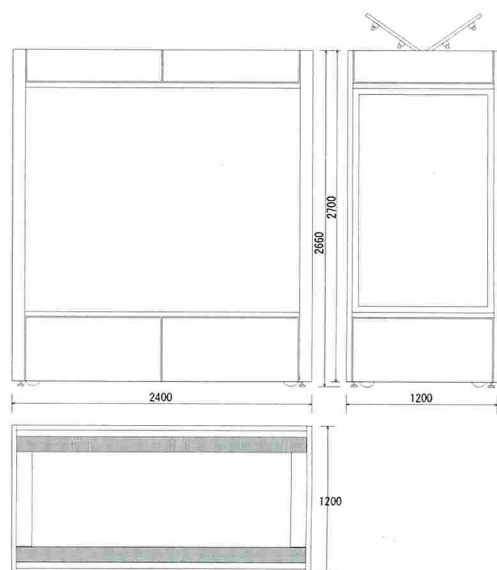


図7 新企画展示室4面ガラスハイケース（可動）



◆建築改装工事

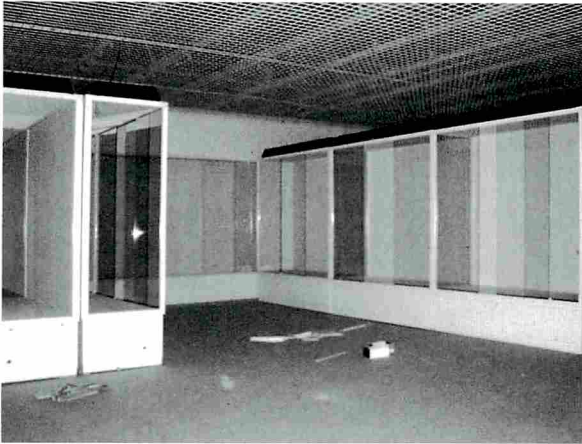


図8 解体前の第二展示室とケース

◆展示工事

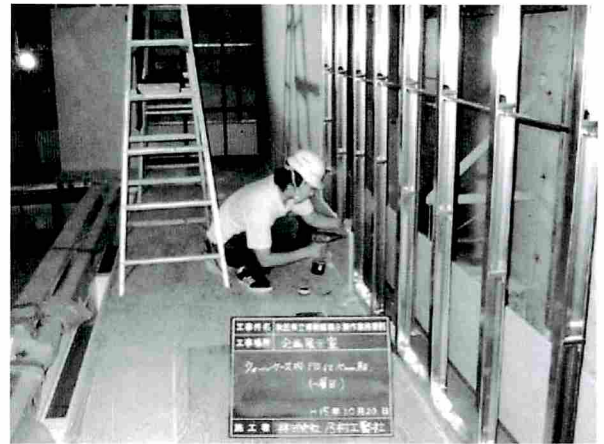


図11 ウォールケース内装下地張り

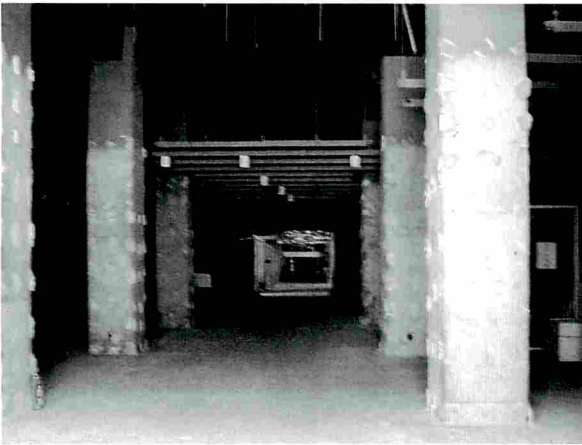


図9 内装を撤去した第二展示室



図12 防湿シートを挟み内装ボード張り

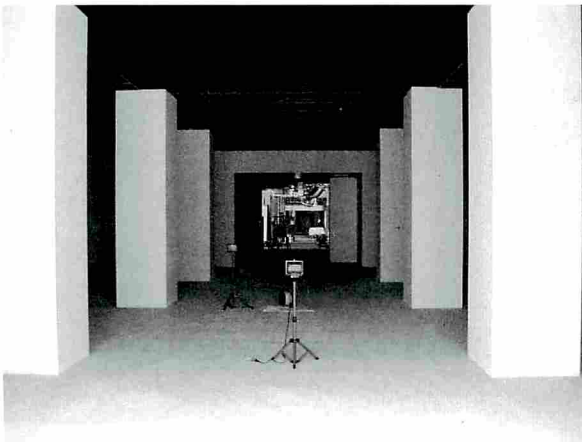


図10 建築改装工事が完成した第二展示室



図13 クロス張り



図14 ランプハウス熱線カットガラス設置

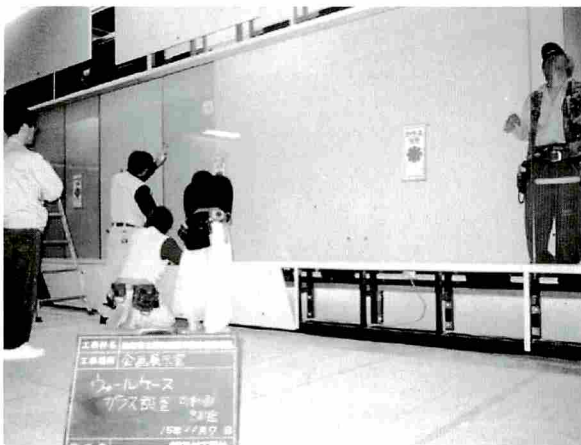
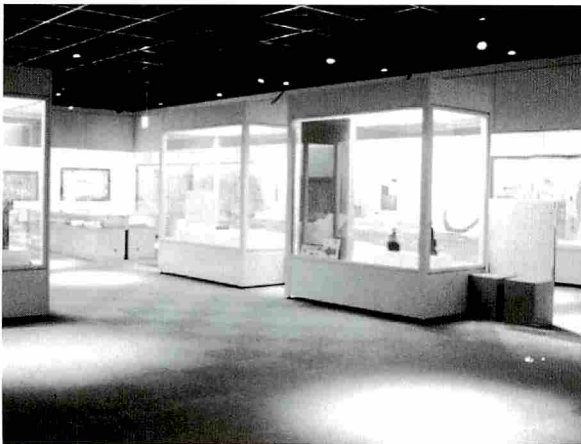


図15 前面高透過ガラス設置

◆完成した企画展示室



北東北三県共同展「描かれた北東北」

おわりに

リニューアル工事で展示室を閉じるまで、企画展示室は文字通り大小の企画展示を行うスペースとして運営されてきており、リニューアル後もその内容に変わりはない。

企画の内容は、秋田の自然史、人文史をテーマを定めて紹介するもの、また東北規模、日本全国規模、あるいは海外の自然史、人文史を紹介するものを中心にしてきたが、時に科学技術をテーマとする企画もあった。県内レベルの比較的予算規模の小さいものを企画展と呼び、東北規模、日本全国規模、あるいは海外の文化に関わる比較的予算規模の大きなものを特別展と呼んできた。近年は年間に企画展3本、特別展が1本で、合計4本の企画を実施してきた。リニューアル後も現行ではこれを維持する体制をとっている。

リニューアル前、企画展示室は大規模展にはやや狭く、日常の企画展にはやや広い感じで、設備の老朽化も相まって、多くの悩みを抱えてきた。これらの悩みを払拭して、スタッフが自信を持って展示を展開できる施設設備に変貌すべくリニューアルに取り組んだ。リニューアルのなった現在、資料展示における阻害要因は財政面以外は全てクリアされたと考えている。今後は幅広い資料の招致を基に今まで以上に魅力的な展示を展開していきたい。